

〔論文〕

## ICTが問い直す生産力・技術・労働・物質代謝論

——ポストコロナ社会への歴史的視座——

十 名 直 喜

名古屋学院大学名誉教授

### 要 旨

コロナ禍を機に、情報通信技術（ICT）の発展と浸透が加速するなか、国、企業、個人もその流れに乗り遅れまいと凌ぎを削っている。ICTは、資本主義にどのようなインパクトを及ぼすのか、その本質は何か、行き着く先はどこなのか。現代資本主義の生産力と技術を歴史的にどう捉え位置づけるのか。

小論は、半世紀前に検討した芝田進午「科学＝技術革命」論および近年の平松民平「資本主義とICT」論、聴濤弘『マルクスの「生産力」概念を捉え直す』、さらにK・マルクス『資本論』などとの対話を通して上記の課題と対峙し、人間と自然の物質代謝、生産、生産力、情報生産、科学・技術、労働、人間発達などについて、原点に立ち返り考察したものである。

キーワード：ICTと情報生産、人間と自然の物質代謝、生産と生産力、科学・技術、労働と人間発達

## Information and communication technology reconsiders the theory of productivity, technology, labor and material metabolism between nature and humans

——A historical perspective on the post-corona-stricken society——

Naoki TONA

Professor Emeritus  
Nagoya Gakuin University

< 目 次 >

- 1 はじめに
- 2 資本主義とICTをめぐる論点
- 3 情報生産にみる「物質性」と「非物質性」
- 4 人間と自然の物質代謝と情報生産——問われる経済学仮説
- 5 生産、生産力、技術とは何か
- 6 生産力と生産性を捉え直す——「生産力の発展」論への新たな視座
- 7 人間発達をめぐる『資本論』と21世紀の対話
- 8 大工業論をめぐる20世紀と現代の視座——半世紀の時空間を越えて
- 9 おわりに

## 1 はじめに

ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）の発展と社会への浸透は、コロナ禍を機に加速しているとみられる。ICTは、資本主義にどのようなインパクトを及ぼすのか。

そうした課題と向きあい、独自の視点から考察しているのが、平松民平「資本主義とICT」（論文&報告資料）である<sup>1)</sup>。現代資本主義の生産力と技術を歴史的にどう捉え位置づけるかについて、ICT論の視点から大胆に論じられている。

資本主義とICTの関係を軸に、大工業、生産力、技術、労働、情報生産、物質代謝、非物質代謝などについて、独自の見解が大胆に提示されており、実に興味深いものがある。さらに、基礎経済科学研究所研究大会（2020.10.4-5 オンライン開催）での報告をめぐる議論が、それに花を添えている。

基礎研大会での平松報告 [2020.10.4] をめ

1) 平松民平「資本主義の余命はどれくらい残っているか…」2020.10.04 基礎研大会報告。  
平松民平 [2021.5] 「第2章 大工業からAI, NET 革命へ—相対的剰余価値の生産」基礎経済科学研究所編『時代はさらに資本論 一資本主義の終わりののはじまり』昭和堂。」

ぐるって、5人からコメントがあり、それぞれに対して平松氏よりリプライがなされた。後日、それを文章化して整理され、リプライについて深められている。そのやりとりが、実に面白く示唆に富む。

そこで、平松報告および議論を手がかりにして、筆者の視点から資本主義とICTをめぐる論点を捉え直した。それが小論の取っ掛かりとなる。いずれの論点と課題についても、これまで筆者が論じてきたこと<sup>2)</sup>とも深くかかわっている。小論の草稿を平松氏にお送りすると、実にていねいかつ興味深いコメントをいただいた<sup>3)</sup>。

筆者にとって、これまで3度の「論争」が印象に残っている。①芝田進午氏との大工業論論争（1973年）<sup>4)</sup>、②渡辺治氏との日本型企业社会論争（1990年）、③島田晴雄氏とのヒューマン

2) 十名直喜 [2012] 『ひと・まち・ものづくりの経済学—現代産業論の新地平』法律文化社  
十名直喜 [2017] 『現代産業論—ものづくりを活かす企業・社会・地域』水曜社、他。

3) 平松民平「ICTが問い直す生産力、技術、露道、物質代謝論—平松民平氏「資本主義とICT」論をふまえて」を讀んで」(2021.2.25)

4) 十名直喜[1973]「大工業理論への一考察(上)」『経済科学通信』第7号十名 [1974]「(下)」第8号。戸名直樹のペンネームで発表。

ウェア（技術&社会）論争（1990年）である。

上記の内、②、③は『経済科学通信』第62、63号で発表し、1冊目の単著書に収めている<sup>5)</sup>。

一方、①は『経済科学通信』第7、8号に掲載されたもので、筆者にとって初めての論文である。働学研の人生を切り拓いた記念碑的作品であるが、どの本にも収めていない。せっかく重要なテーマを扱いながら、これまで正面から論じる機会がなかった。平松氏に①を取り上げていただき、長年放置してきた宿題と対面する。そこで、これを機にオンライン研究会で「対話」を通して議論を深め、新たな視点を切り拓くことができなにか。

そのプラットフォームとなるのが、「働学研（博論・本づくり）研究会」（略称、働学研）である。働学研には、多様な思いや目的を持った方が参加されている。仕事や生活に向き合い研究したい、論文や冊子をまとめたい、博士論文をめざしたい、本にまとめて出版したい等々。

研究の初心者から熟達者に至る社会人研究者の多様なニーズに応え、楽しく真摯に議論できる研究交流の場として、2019年7月に発足した。定年退職（同3月）後の新たな挑戦である。

月1回、月例会を開き、2020年7月以降は、オンライン開催に切り替えている。月例会には20～30名の参加、10本近い報告があり、活発な議論がなされ、多様な出会いや研究が生みだされつつある。

5) 十名直喜 [1993] 『日本型フレキシビリティの構造』法律文化社。  
「第4章1 日本型企业社会にみる前近代性の構造—渡辺治『「豊かな社会」日本の構造』の検討をふまえて」&「第5章 日本型ヒューマンウェアの内と外—島田晴雄『ヒューマンウェアのコメントを通して』」。

第17回働学研（2021.1.23）での小報告（十名「産業イノベーションと環境文化革命」<sup>6)</sup>）を機に、平松氏との対話が始まる。第18回働学研（2021.2.20）では、平松報告（「資本主義の余命とICT革命」）があり、それを受けて第19回働学研（21.3.20）の第2分科会「資本主義と人間発達—生産力&物質代謝論の新地平」で発表したのが、小論の草稿である。

さらに、そこに参加された聴濤弘氏の最新著『マルクスの「生産力」概念を捉え直す』書評会を、第20回働学研（21.4.17）の第3分科会で行った。そこでのわが総括コメントのエキ스는、小論にも織り込んでいる。

資本主義とICTをめぐる議論は、生産力、技術、労働、組織、情報、物質代謝、非物質代謝、金融資本主義へと展開する。それぞれの定義、あり方まで俎上に載せることになった。コメントとリプライを何回か重ねるなか、対話を通して、これまでにはない知的な新地平を切り開くことができればと思っている。

## 2 資本主義とICTをめぐる論点

### 2.1 資本主義の余命はどれくらいか——ICTによる終焉説

ICT論の視点から、現代資本主義の余命を論じたのが、平松民平「資本主義の余命はどれくらい残っているか…」で、基礎経済科学研究所の研究大会（2020.10.04）で報告されたものである。

「資本主義がいつ終わるか」をめぐる、2つの説を取り上げる。1つは、「資本主義限界

6) 十名直喜 [2021.1] 「産業イノベーションと環境文化革命—ポストコロナ社会への歴史的視座」『SBI大学院大学紀要』第8号。

&終焉説」である。諸問題が深刻化するも、解決不能で、あるべき産業論を語れない、という。

2つは、ICTが促す「資本主義終焉説」で、平松氏の自説である。機械制大工業とICTを対置し、「機械制大工業が資本主義を創り、ICTが資本主義を終わらせる」とみる。

平松氏のICT論には、興味深い視点や論点が随所にみられる。報告資料は、多岐にわたって論じられており理解するのも簡単ではないが、以下に概略紹介する。

今日の生産力はICTに担われ、生産の中心が物質財から情報財へシフトしつつある。「生産とは労働の固定」である。生産物は、「情報と物質に分離することで、統一的把握が可能」になる。労働は、情報生産労働と物質化労働から構成される。情報は、文字&音声（言語）に担われて人間間を循環している。これを、「非物質代謝」と捉える。

ICTは、生産物も生産手段も情報財であり、情報を「非物質な生産手段」に転化する。「手の労働から言語労働へ」と労働が変容する。

物質財から情報財へのシフトに伴い、所有も変容する。物質財の所有（私的、社会的所有）から、情報財は、シェアリングでき私的所無なしに自由に利用できる性質をも持つ。

情報財は、「所有なき財」ゆえ「資本主義に不適合な財」であり、「超共有」の共産主義に適合する財とみなしている。

## 2.2 「資本主義とICT」論をめぐる質疑応答

平松報告をめぐる、5人から質問が出され

た<sup>7)</sup>。平松報告に強く触発されての質問である。現実には、もっと多様かつ複雑ではないか。それほど単純明快に割り切れないのではないか。そのような思いが、いずれにも感じられる。

その「わだかまり」は、いずれも本質に関わっているとみられる。しかし、それを解きほぐすのは簡単ではない。そう感じつつ、研究大会を後にした。

その後、平松氏は上記の質疑応答について整理され、質問者各位に送っていただき、コメントを求められた。即答するのは簡単ではなさそうゆえ、長らくそのままにしていた。月例の第17回働学研（2021.1.23）に、平松氏が参加され交流するなかで、宿題が残っているのに気づく。そこで、平松報告と質疑応答へのコメントとしてまとめたのが、小論の草稿である。

平松氏が投げかけているテーマと論点は、想定以上に、複雑かつ深いものがある。小論をまとめるなか、あらためて感じた次第である。

## 2.3 情報・生産・労働・人間発達を問い直す

機械制大工業とICTでは、労働および人間発達の在りようはどう変わるのか。情報生産の意味するものは何か。そうした課題に迫るのが、平松民平 [2021.5] である。

7) 質問1:社会変革なしの自動的変革論であるが、現実にはIT化によりbullshitジョブは増大している(竹内)。

質問2:デジタル社会においても、やはり物質は重要である(高田)。

質問3:「生産力の中心は技術、ICTが社会主義をつくる」とあるが、生産力の中心は人間であり、組織である(十名)。

質問4:富に関して情報と通信サービスに限られていて、富を狭く捉えている(吉田)。

質問5:情報が資本と所有から離れているというが、現実には逆とみられる(野口)。

機械制大工業と人間発達の関係については、前者が後者の諸条件をつくり出すという『資本論』の指摘を、そのまま紹介している。

情報とは何か、情報生産とは何かを問い直す。「情報の非物質性」に注目し、情報生産は、人と自然との物質代謝ではなく、人と人との非物質代謝である、という。

マニュファクチュアから機械制大工業へ、さらにICTへとシフトする。ICTでは、労働が手から言語へ変化し、言語的労働が生産過程に組み込まれる。情報生産に伴う労働の変容は人間の全面的発達を促す。ICT化した生産過程の分析では、労働価値説がさらに有効であるという。

平松氏のICT論は、興味深いのが、検討すべき論点も少なくない。情報とは、情報生産とは何か、自然と人間の物質代謝&非物質代謝とは何か、生産力とは何か、技術や労働とは何か、人間発達とは何かなど、論点は多岐にわたる。

それらの論点について応えるには、原点に立ち返り、本質から問い直し捉え直す必要がある。

### 3 情報生産にみる「物質性」と「非物質性」

#### 3.1 「物質」と「非物質」——ICTと情報

平松民平 [2021.5] は、情報の本質は非物質性にある、という。

「情報は物質から離れては存在できませんが、特定の物質に固着せず、物質から物質へ渡り歩く、つまり、情報の本質は非物質性にある」。

「物質」とは何か、「非物質」とは何か。両者の違いは何か、があらためて問われよう。

「物質」とは、「質量と体積をもつもの」である。なお、「質量」とは、「物体の動かしにくさの度合いを表す量」、「重力を生じさせる要因となる量」であり、「重さ」とみることができる。物質とは、重さと体積を持つものといえる。

一方、「非物質」は、「物質としての存在をもたないもの」とされる。重さと体積をもたないものである。時間、空間や精神の概念などが、「非物質」とされる。情報の内容も、非物質に属するとみられる。

ICTは、電子の世界を対象とする電子工学の技術である。電子空間で生産される情報は、電子という極小の物質に担われている。

電子は、宇宙を構成するレプトン（物質の基本的な構成要素）に分類される素粒子で、極小（10のマイナス15乗メートル）の物質である。原子（10のマイナス10乗メートル）の中心に原子核があり、その周りを回っているのが、電子である。物質の下部構造は無限に続く、という「無限階層論」（坂田昌一）もみられる<sup>8)</sup>。

#### 3.2 「情報」の「非物質性」と「物質性」

情報は、非物質と物質の両面を有するとみられる。確かに、情報の内容は、「非物質性」といえる。しかし、情報の内容はそれだけで存在するものではない。文字・数字などの記号やシンボルの媒体すなわち物質によって担われるからである。

情報とは、そもそも何か。「情報」とは、「ものごとの内容や事情についての知らせ」のことである。文字・数字などの記号やシンボルの媒体によって伝達される。受け手において、状況に対する知識をもたらしたり、適切な判断を助けたりするものことである。

「一般システム理論」では、情報を「何らかのパターン」と見なす。パターンが、別のパターンの生成・変換に影響を与える、と見なす。パ

8) フリー百科事典『Wikipedia』「原子」、「原子論」、「電子」、「電子工学」、「レプトン」参照（2021年3月28日アクセス）。

ターンを知覚する意識は、理論に組み込まれておらず、パターンを評価する必要もない、と考える。意識がなくても情報は存在する、としてシステム内を循環するパターンを情報と呼ぶことができる、と考える。

「パターンに担われているのが情報」とみる平松氏の理解は、一般システム理論に基づくとみられる。

なお、唯物論における物質概念と自然科学における物質とは同一ではない。自然科学における物質は、原子、素粒子など諸実態をさし、物質とエネルギーを区別する。一方、唯物論における物質は、物質、エネルギーさらに自然的・社会的な諸関係もすべて含む概念である。情報は、物質の属性である反映・反射の1つの形態、秩序ある反映とみなされる<sup>9)</sup>。

### 3.3 情報の「非固着性」と「遊離・再結合性」

コンピュータ制御技術は、ハードウェアとソフトウェアに分離し、両者の組み合わせを自由にした。それまでの機械にあっては、構造と機能は一体不可分であった。コンピュータ制御技術の登場によって、ハードウェアとソフトウェアに分離し、多様な再結合を可能にするようになる。

アリストテレス以来の「物質と情報の不可分」も、コンピュータ制御技術によって分離・再結合が可能になったとみることができよう。しかし、情報は遊離したままでは、存在できない。何らかの媒体（物質）との再結合が不可欠である。すなわち、記号やシンボルの媒体、さらにそれらを表示する媒体（紙やコンピュータ画面など）によって担われるのである。

9) 中村静治 [1987]『情報の技術と経済学』有斐閣。

「特定の物質に固着せず、物質から物質へ渡り歩く」という情報の特徴は、固着しないが媒体から遊離してしまわない、すなわち非固着性と遊離・再結合性にあるとみることができよう。

### 3.4 文字情報の継承と発展——人類の文明と言語、文字

ユヴァル・ノア・ハラリ [2011] は、歴史の道筋を決めたのは、3つの重要な革命だという。1つは約7万年前の認知革命、2つは約1万2千年前の農業革命、3つは500年前に始まった科学革命である。「認知革命」とは、7万年前から3万年前にかけて見られた、新しい思考と意思疎通の方法の登場、のことである<sup>10)</sup>。

現生人類が約7万年前に獲得した新しい言語（音節）とそれを使いこなす言語技能は、舟やランプ、弓矢、針の発明、洞窟壁画などの芸術を生み出すなど、人類の「認知革命」をもたらした。限られた数の音声や記号をつなげて異なる意味を持つ文をいくらでも生みだせる。伝説や神話、神々、宗教、芸術などもつくりだす。言語は、膨大な量と多様な質の情報を創造・収集・保存・伝達することを可能にしたという<sup>11)</sup>。

情報生産は、まさに言語によって切り拓かれ、爆発的な増加を生み出したのである。まずは会話によって、やがて文字の発明によって新たな質と量の情報生産を生み出していく。そこには情報生産のもつ非物質的な特徴がみられる。

英国の分子生物学者ジョン・メイナード＝スミス他 [2001] は、人類の言語進化をデジタ

10) ユヴァル・ノア・ハラリ [2011]『サビエンス全史—文明の構造と人類の幸福 (上)』柴田裕之訳、河出書房出版社、2016年、第1章。

11) ユヴァル・ノア・ハラリ [2011]、前掲書、第2章。

ル進化とみなし、音節、文字、電子化の3段階の発展と捉える<sup>12)</sup>。

なお、上記の見方に共通しているのは、言葉話し、統語法を使う能力が、脳などの言語器官に遺伝的に組み込まれたのは、ごく最近(数万年)前)のことだとみなす点である。

それらの見方を「ビッグバン」・突然変異説とみなし、それに疑問を投げかける別の見方がある。話し言葉は、道具製作と同じように霊長類がつくりあげてきたものであり、その発明が脳や声の器官の生物学的進化を推し進めた。現生人類が数万年前～10万年前にアフリカを離れるずっと以前から、話す、描く、象徴を使うといった技術を会得していたとみなす見解である。

話すことに適応するような特殊な脳拡大の過程は、200万年前に始まり150万年前以前にもっとも加速したという。象徴的な概念などを操作する人類の新しい脳の高い能力は、話すこと以外の複雑な仕事へも向けられた<sup>13)</sup>。精巧な石刃、石臼、顔料などは、ヨーロッパの上部旧石器時代(4～5万年前)に特徴的なものとみなされてきたが、それらは28万年前のアフリカにあった。彼らがアフリカを出るとき、すでに描き、話し、歌い、踊る完全な現生人類だったという<sup>14)</sup>。

認知革命は、技術と文化の連続的・加速的発展が特異点に達し、それ自体がバネとなって指数関数的な発展をもたらしたとみるのである。

いわば連続的・加速的発展説である。先述の「ビッグバン」・突然変異説に対置されよう。

L・マンフォード [1952] は、表象能力の重要性に注目する。「人間とは、道具づくりである以前に、先ず映像(イメージ)をつくる者であり、言語製作者であり、いわば夢想家であり芸術家であった」。そして、道具づくりと表象づくりの資質が相並んで発達したとみる<sup>15)</sup>。

L・マンフォード [1966] は、「話し言葉」を人類が獲得したこと画期的な意義を次のように述べている<sup>16)</sup>。

「原初の人類の状態に置いて、整然とした話し言葉を得たことは、…完全な人間の状態に向かって最大の飛躍をしたことを証するものである。…音声表現の助けによって、人類は初めて社会的共有と相互的共感の範囲を広げた。そして、ついに理解しうる話しことばの段階に達したとき、増殖する象徴的世界…を創り出した。意味の領域である。」「象徴をつくる能力は、あらゆる人間行動の基盤であり、本質である。」

言語は、人間の意思や感情を伝達する記号体系である。そして文字は、言語を伝達し記録するために、線や点を使って形づくられた記号である。文字の起源は、ものごとを簡略化して描いた絵文字であり、それが転用されたり、変形、簡略化されたりして、文字になったとみられる<sup>17)</sup>。

文明とは、「文字情報の継承と発展によって生まれた言語的現象である」といわれる。農業生産の余剰が王朝を生み、王朝が絵文字をつく

12) ジョン・メイナード＝スミス/エオルジュ・サトマーリ [2001] 『人類進化の8つの謎』長野敬訳、朝日新聞社。

13) スティーバン・オッペンハイマー [2003] 『人類史の足跡10万年全史』仲村明子訳、草思社、2007年、「エピソード」。

14) スティーバン・オッペンハイマー [2003]、前掲書、第2章。

15) L・マンフォード [1952] 『芸術と技術』生田勉訳、岩波書店、1954年、1 芸術と表象。

16) L・マンフォード [1966] 『機械の神話』樋口清訳、河出書房新社、1971年、第4章。

17) フリー百科事典『Wikipedia』「文字」参照(2021年4月8日アクセス)。

りだした結果、知識を文字情報として残すようになる。さらに次世代が、それを受け継ぐことで、文明と呼ばれる急速な技術蓄積が起きたのである。文明とは、「文字情報による知識の継承の結果、累積した技術進歩である」<sup>18)</sup>。外部メモリとしての文字が、文明を生んだのである。

人類の文明は、文字とともに歩み、発展してきた。歴史は、文字とともにあったのである。世界中の古代文明のほとんどが、文字による記録をもち、多量の文献を残してきた。書かれた内容も、今では大部分明らかになっている。

### 3.5 情報生産の手段と対象

#### ——書く道具と媒体

しかし、文字を書く道具や書かれた媒体については、これまでスポットをあてられることが少なかったようである。文字の記録に使用された道具と媒体は、実に様々なものがある。書く道具と媒体が、文字の書き方や書体を決定し、ひいては書かれる文章のスタイルや内容にまで深くかかわってきたとみられる<sup>19)</sup>。

媒体については、紙が出現する以前、粘土板、パピルス、羊皮紙、甲骨、石、竹、木などが使われた。紙の発明と普及によって、人類の文化は大きく進んだ。

紙の発明とともに、印刷が世界で最初に行われたのも、中国である。木版印刷に続いて、中国で最初に発明された活字印刷は、世界でもっとも使われた印刷形態である。しかし、漢字圏の国々では、活字印刷はそれほど流行しなかつ

た。漢字は、きわめて多種類の文字の活字を必要とする。そのため、印刷作業が煩雑になるからである<sup>20)</sup>。

西洋における活字印刷の発明者は、グーテンベルクといわれる。その優れた点は、まず活字の母型をつくったことにある。それによって、活字の互換性が確立され、印刷技術の普及に大きく貢献した。

書く道具としてはペン、ナイフ、筆、鉛筆、タイプライターなどが使われた。18世紀に登場のタイプライターは、文字や文章を書く環境として画期的な意義を持った。その改善と普及によって、欧米における文章表記は新しい時代に入る。

日本語を書くための画期的な道具として、誕生したのが、ワードプロセッサ（略称、ワープロ）である。ワープロの登場は、新しい文房具の出現というだけにとどまらず、日本語を表記する環境そのものに画期的な変革を与える。「歴史的にみても、これほど大きな影響を与えた道具や機械はこれまで存在したことがなかった」<sup>21)</sup>。

その後、パーソナルコンピュータ（パソコン）の出現と制御・通信技術の発展によって、情報生産はさらなる飛躍を遂げるのである。

## 4 人間と自然の物質代謝と情報生産

### ——問われる経済学仮説

#### 4.1 「人工的」世界の特異性と「非物質代謝」

H・アーレントは、人間のつくり出す「人工的」世界の特異性、人間の「非自然性」に注目する。仕事は、人間の「非自然性」に関係する。

18) クーリエ・ジャボン「『文字の誕生』で人類は何ができるようになったのか？」<https://courrier.jp/columns/104945/>（2021年4月8日アクセス）。

19) 阿辻哲次 [1991]『知的生産の文化史』丸善、序章。

20) 阿辻哲次 [1991]、同上、第2章。

21) 阿辻哲次 [1991]、同上、第4章。



人間は、自然とはまったく異なる世界、時間を超えて存続する世界、自然環境と際立って異なる「人工的」世界を作り出す、という<sup>22)</sup>。

平松 [2021.5] も、情報の生産を「非物質代謝」として捉え直している。確かに人間は、「自然環境と際立って異なる…「人工的」世界を作り出す」。そして、自然の物質循環を量的に越え、これまでに無い物質循環までつくり出す。それを、「非物質代謝」と表現するのである。

ただし「非物質代謝」には、「非物質」代謝という意味だけでなく、非「物質代謝」（「物質代謝」をしない）という意味も含まれており、注意を要する。

「人工的世界」とは何か、「非物質循環」とは何かが問われよう。

地球的環境は、巨大かつ複合的な物質循環によって成り立っているゆえ、正確な表現とはいえない。「人工的物質代謝」を指すのではと推察される。

しかし、「人工的」世界や「非物質代謝」は、「無」から創り出すわけではないし、自然環境と切り離された別世界でもない。広義には「大自然」の一部であり、宇宙と地球環境の法則世界のなかにある。

#### 4.2 情報生産にみる物質代謝と「非物質代謝」

物質代謝は、生体内で行われる物質の（分解および合成に関する）化学変化の総称、のことである<sup>23)</sup>。マルクスは『資本論』において、物質代謝の概念でもって、社会的労働過程を自然過程の姿において捉える。生産において、人間は「素材の形態を変えることができるだけ」で

あり、自然の摂理を超えていない、という<sup>24)</sup>。

人間の労働を「人間と自然のあいだの1過程」とみなし、「人間と自然との物質代謝」とみなした。その媒介、規制、調整の過程において、重要なカギを握るのが、情報である。建てる前に「すでに頭の中で築いている」点が、建築師と蜘蛛・蜜蜂との違いである、とマルクスも述べている<sup>25)</sup>。頭の中で事前に設計図を描き、それに沿って材料を加工し組み立てていく。さまざまな情報が発生し、制御しながら進めていく。

労働過程は、「頭の労働と手の労働」から成り立っている。両者は本来、合一したものであるが、資本主義的生産のもとで分離・対立を深めていく<sup>26)</sup>。

「頭の労働」の側面は、まさに情報生産のプロセスにはかならない。情報生産にみる爆発的増加は、記号やシンボルで表示される媒体の生産・通信技術の発達によるところが大きい。情報生産は、まさに言語によって切り拓かれ、爆発的な増加を生み出したのである。

平松氏は、情報の生産を人間と自然の間の物質代謝の中に位置づけるのは無理がある、という。情報の循環は、声や文字を媒介にして、人と人の中でなされているからだという。そして、情報生産を「非物質代謝」として捉え直している。

確かに、情報の内容は非物質である。しかし、その内容は、種々の媒体（物質）によって担われる。音声も、物質である。人間の発声器官によって発せられ、電波を経由し聴覚を経て、脳

22) H・アーレント [1958]『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年。

23) フリー百科事典『Wikipedia』「物質代謝」参照（2021年3月28日アクセス）。

24) K・マルクス『資本論』第1巻、第1章。「労働は素材の富の父であり、土地はその母である」というウィリアム・ペティの名句も付している。「土地」は、自然を意味する。

25) K・マルクス『資本論』第1巻、第5章。

26) K・マルクス『資本論』第1巻、第14章。

細胞に届くなど、媒体を通して機能する。

したがって、情報生産を「非物質代謝」とみなすことは、情報生産の一側面の把握にとどまり、人間と自然の物質代謝というより大きな枠組みを見落とすことにならざるをえない。情報生産も、人間と自然の物質代謝という枠を超えることはできないのである。

そもそも、「非物質代謝」という概念が成り立つかどうかも定かとはいえない。言語は、さまざまな会話や物語、芸術、科学などを生み出してきた。情報や知識の内容は、非物質であるが、それ単独では存在できない。音声、文字、印刷物、電波、電子などの物質を媒介して、人間の目、脳（という物質）に届き理解して、新たな象徴を紡ぎ出す。それらは、すべて物質を媒介しており、物質代謝のプロセスに他ならない。

#### 4.3 地球的自然の物質循環と『資本論』にみる産業循環論——「非物質的代謝」への視座

『資本論』では、人間と自然の物質代謝論に基づく独自の産業循環論が提示されている。

資本主義社会の下で、工業と農業、都市と農村の関係、いわば社会的な物質代謝が分断され、両者が対立する関係が生みだされる。両者の分断と対立が深刻化し、地域や産業の破壊と貧困化、さらには地球環境の危機が進行するなか、工業と農業、都市と農村のより高次の総合化が、人類の危機を克服するカギとなる。『資本論』は、そのように警鐘を鳴らし、提言している。

それを現代的に捉え直し「環境文化革命」として提示したのが、十名 [2012] 『ひと・まち・ものづくりの経済学』である。さらに十名 [2017] 『現代産業論』では、現代産業論として体系的に提示している。

ICTは、製品の小型化、物的生産からサービスへの転換を促すなど、経済のウェイト-レス (weight-less) 化を進める触媒となっている。それは、「経済の脱物質化傾向」と呼ばれている<sup>27)</sup>。人間社会と自然の物質代謝における非物質性の比重を高めていることから、「非物質的代謝」と特徴づけることもできよう。

「非物質的代謝」は、確かに人工の世界であるが、地球と宇宙の物質循環のなかで、さらに地球的自然の物質循環における、自然と人間との物質代謝に包摂され、その一部であるという制約を免れない。それゆえ、「非物質的代謝」としての独自の特徴を有しながらも、広義の物質代謝の枠内にあり、そこから遊離することはできないのである。

今日、深刻化している地球環境の危機は、地球的自然の物質循環が大きな変容を受けているだけではない。地球的自然の一部である人間そのものにおいても、有形、無形にまたがる物質代謝の深刻な危機が進行している。

「非物質代謝」論は、その独自の特徴を強調するあまり、自然の一部であるという巨視的な視点が欠けているといえよう。

#### 4.4 経済学の「無限の自然」仮説を問い直す

1960年代のなかば頃からスチーブソン、ボールディング、バーバラ・ウォードなどにより提唱された「宇宙船地球号」は、無限地球観から有限地球観への発想転換を促した。

世界に衝撃を与えたのが、ローマ・クラブ

27) D・コイル [1997] 『脱物質化社会』(The Weightless World) 室田泰弘他訳、東洋経済新報社、2001年。

[1972]『成長の限界』<sup>28)</sup>である。地球の有限性という立場から人類の破局を警告し、成長ゼロの定常状態への早期移行を提唱した。

「成長の限界」をめぐる議論が巻き起こるなか、鋭く批判したのが芝田進午 [1973] である<sup>29)</sup>。「成長の限界」は「資本主義的成長の限界」を示すと批判し、社会主義・共産主義のもとでの科学・技術の発展の無限性、その幾何級数的進行という命題を対置する。現実からかけ離れたその楽観論に対して、疑問や批判が集中した。

今や地球の有限性がより明らかになり、地球の温暖化など地球環境の深刻な劣化を、誰もが日々痛感する時代を迎えている。

これまでのような経済成長が今後、永遠に続かないことは明白であるにもかかわらず、経済成長論に囚われる人は今も少なくない。

それはなぜか。経済理論の前提に、「無限の自然」が仮説としておかれているからである<sup>30)</sup>。

経済学では、生産と消費が永遠に続くような議論が行われてきた。経済活動を具体的に支える物質循環やエネルギー収支の視点が欠けているとみられる。

近代経済学では、需要と供給が繰り返されるが、それを支える物的・エネルギー的・エントロピー的な根拠は示されていない。

マルクスが再生産を論じるときも、単純再生産と拡大再生産に分けているが、論じられてい

るのは経済的価値にとどまる。拡大再生産では、資源の浪費と廃棄物の発生も加速され、地球的自然の限界を迎える時期は早まる。

いずれも、ニュートン力学的な自然認識レベルにとどまっているとみられる。永遠で様な時間と無限で摩擦のない均質な空間というニュートン力学の仮説は、「劣化しない無限の自然」という経済学仮説のベースになっている。

A・スミスは自然を有限と見なし、その生産物も有限とした。D・リカードは、自然を有限と見なしながらも、外国貿易を入れることで無限の自然という仮説を立て、無限の商品を論じた。自らの経済理論の合理的説明のために、本来有限な自然をあえて無限と設定したのである。

リカードからミルへと続く古典派経済学において、「無限の自然」を仮説として経済を論じるスタイルが確立する。この自然観の転換こそ、問い直しねばなるまい。

ワルラスの一般均衡理論における「絶対的な自由競争が行われる完全な市場」仮説は、ニュートン力学での「絶対空間」仮説に基づいている。ワルラスはそのことを明示するとともに、他方で「無制限に増加しうる生産物はあり得ない」とのべ、リカードやミルが無限の商品を経済理論の前提にしていることを批判している<sup>31)</sup>。

「無限の商品」を仮説としておくことで自然の問題を捨象し、多様な人間と人間の経済的関係を量的にのみ評価することが可能になり、数学を使った「科学」として踏み出す。労働さえ投入すれば、経済的価値は無限に増加する、とみなすようになる。

そして、「無限の経済成長」が追求されるのである。資源の希少性をキーワードとする新古

28) D・H・メドゥズ他 [1972]『成長の限界』大来佐武郎訳、ローマ・クラブ「人類の危機」レポート、ダイヤモンド社、1972年。

29) 芝田進午 [1973]「地球破局」論と科学=技術革命」(『現代と思想』第12号、1973年6月)。

30) 中村 修 [1995]『なぜ経済学は自然を無限ととらえたか』日本経済評論社。

31) L・ワルラス [1874,77]『純粋経済学要論』久武雅夫訳、岩波書店。

典派経済学（限界効用理論）においても、「無限の自然」仮説が無意識に前提とされている<sup>32)</sup>。

『資本論』は、古典派経済学の徹底した批判に基づいているが、「無限の自然」観を根底から批判し捉え直すに至っていないとみられる。マルクスは、自然の働きを明らかにしながらも、労働価値説を論じる際は、「劣化しない無限の自然」という仮説上での展開とみられる。

「生産力至上主義」をめぐる議論は、『資本論』や史的唯物論を俎上に載せているが、近代経済学、マルクス経済学のいずれもの前提＝仮説とされる「(劣化しない)無限の自然」観そのものを問う議論には至っていない。

問い直すべきは、経済学仮説としての「劣化しない無限の自然」観ではなかるうか。

ニュートン力学は天上の運動を論じたが、地上の運動を論じるには産業のために発展した熱力学が不可欠であり、21世紀の経済学においても求められている。

経済は、生物である人間が行う地上の活動であり、自然の生産を基礎にした活動である。それゆえ経済活動は、熱力学の法則と自然の物質循環から免れることはできない<sup>33)</sup>。むしろ、非可逆的な自然の法則をふまえることで、従来の経済学に対して新たな知見（さまざまな制約と可能性）を与えるとみられる。

なお『資本論』では、労働過程を人間と自然の物質代謝として捉えるとき、自然の一部としての人間の物質的有限性を意識しているとみられる。それは、自然の有限性への意識でもある。

一方、資本主義的生産がもたらす自然（すなわち土地と人間）の劣化にもメスを入れている。

「資本主義的生産は…人間と土地との間の物質代謝を攪乱する…土地の豊饒性の持続の永久的自然条件をかく乱する…都市労働者の肉体的健康をも農村労働者の精神生活をも破壊する」<sup>34)</sup>。

「生産力の発展」を社会発展の機動力とする史的唯物論は、「無限の自然」観という歴史的制約を受けながらも、それを乗り越えようとする視点も内包しており、今なお人類発展への重要な指標とみられる。生産とは何か、生産力とは何かという重要な点において、現代においても示唆に富む洞察がなされているからである。

しかし、地球環境の深刻な危機に直面する21世紀のわれわれは、そこに踏みとどまるわけにはいくまい。熱力学の法則と自然の物質循環をふまえ、生産、生産力、情報、物質代謝のあるべき姿と理論を再構築することが求められている。

「生産力の発展」論についても、「劣化する有限の自然」という仮説に基づいて、根底から再検討することが求められているといえよう。

## 5 生産、生産力、技術とは何か

### 5.1 生産力の自動変革論を問い直す

平松報告をめぐる議論において、「社会変革なしに自動的に社会が変わるというのは信じがたい」（竹内）との批判が出された。それに対して平松氏は、「広義には自動変革論といえる」としたうえで、「人がつくった生産関係を崩すのは人」で「意志による変革は当然」とされる。

生産力は技術によって担われ、それに照応した生産様式を人がつくる。生産力との不適合が拡大すると、生産様式は寿命を終えて交代する。

32) 中村 修 [1995], 前掲書, 第3, 4章。

33) 中村 修 [1995], 前掲書, 第2章。

34) K・マルクス [1867]『資本論』第1巻第13章。

その論理から、機械制大工業が資本主義をつくり、ICTが資本主義を終わらせる、というのである。

生産様式は人がつくるから、その変革も人が担う。一方、生産力は技術によって担われ、技術が生産力を変えていくという論理である。

生産力の主役・主体は本当に技術なのか、生産力とは何かが問われよう。その前に、生産とは何か、をみておかねばなるまい。

## 5.2 生産とは何か

「生産力とは何か」という問いが、いま注目を集めている。生産力の発展が、自由の拡大、社会発展につながるとみるのが、マルクスの思想（史的唯物論）である<sup>35)</sup>。ベストセラーの斉藤幸平 [2029] は、それを「生産力至上主義」とみなし、定常型ゼロ成長社会をめざす新しい社会の障害になると批判する<sup>36)</sup>。

「生産力」と聞くと、経済成長やGDPをイメージする人も少なくない。経済成長志向＝生産力至上主義とみなし、「生産力」そのもの、さらには「生産力の発展」への厳しい眼差しや批判へと連動する。

「生産力至上主義」論に対して、平松氏は「生産力と生産を混同している」と批判する。「生産力」と「生産」を明確に区別して論じるべきであるとの指摘は、至言である。それでは、平

松氏の区分は理に適っているかどうかが問われよう。

平松氏は、「生産力」と「生産」は、「能力」とその「アウトプット」の関係とみる。

「生産力」は、「超歴史的に発展、成長を続ける」「生産を選択する可能性を与え、生産の自由を規定する」。一方、生産は、「生産力の具体的結実であり、使用価値の源泉であり、時の生産様式と社会的需要によって規定される」<sup>37)</sup>。ここでは、生産力と生産の関係が、能力と結果の関係として捉えられている。

しかし、そのような捉え方は「生産力至上主義」、「生産力信仰」へと誘う道でもある。「生産力」そのものを問うには、「生産」とは何かをまず問わねばなるまい。両者の関係を、能力と結果とみるのは、現象論的な把握といわねばなるまい。むしろ、逆の視点から本質的に捉え直す必要がある。

1つは、本来まず「生産」という目的があり、それを担う手段、能力として「生産力」があるはずである。目的と手段として捉え直す必要があろう。

2つは、何よりも目的に位置する「生産」概念の捉え方が重要である。「生産とは何か」が、あらためて問われねばなるまい。

「生産とは何か」を考える場合、F・エンゲルス [1884]『家族、私有財産および国家の起源』の序文に示された、「唯物論的な見解によれば、歴史における究極の規定的要因は、直接的生命の生産と再生産である。…」の指摘が示唆に富む<sup>38)</sup>。それを、現代的に読み解くと、「生産」と

35) 史的唯物論が確立するのはK・マルクス/F・エンゲルス [1845-46]『ドイツ・イデオロギー』、それを定式化したのがK・マルクス [1859]『経済学批判』「序言」、さらに「序言」を理論的に実証しようとしたのが『資本論』、とみられる（聴濤弘 [2021.3]『マルクスの「生産力」概念を捉え直す』かもがわ出版）。

36) 斉藤幸平 [2020]『人新世の「資本論」』集英社新書、第4章。

37) 平松民平 [2021.2.21]「斉藤幸平『人新世の「資本論」』を読んで」。

38) F・エンゲルス [1884]『家族・私有財産・国家の起源』(村井康男・村田陽一訳、国民文庫、大月書店、1954年) 序文。

は何かが浮かび上がってくる。

「生産」とは、社会が存立するための最も基本的な人間の活動である。その根幹をなすのは、人間の生命・生活の生産と再生産である。生産は、広義には①（生殖と子育てによる）生命の生産と再生産、②労働による生活資料の生産から成る。両者は、根源的には統一されていたが、生産の発展過程において両者が分離・分化していくなか、②の優位性が高まり、①を規定するようになる。①が軽視され疎外される傾向が強まるなか、少子化の深刻化が社会の大きな問題となっている。

「生産力至上主義」論およびその批判論者のいずれも、生産の捉え方に問題があるのではなからうか。「②労働による生活資料の生産」視点に偏っている、あるいは囚われているとみられる。最も基本であるべき「①（生殖と子育てによる）生命の生産と再生産」は軽んじられ、ほとんど視野に入っていないのではなからうか。

十名 [1973] は、上記の①と②を、「人間そのものの生産」と「物質的富の生産」として捉え直している。また「人間そのものの生産」については、「種の繁殖」すなわち「生殖と子育て」にとどまらず、さらに「科学・技術の生産」へと視野を広げている。科学・技術労働は、「生命活動の普遍性に由来する」とみなしてのことである。

なお、平松氏のいう「生産力の具体的結実」とは、「生産」ではなく、「生産物」を指すとみられる。生産、生産力、生産物の関係は、目的、能力・手段、結果の関係として捉えることができる。平松氏のいう「能力」と「アウトプット」の関係は、生産力と生産物の関係に他ならない。

### 5.3 生産力とは何か——技術・労働・組織への視座

「生産力とは何か」が、あらためて問われている。筆者は次のように捉える。

「生産力」とは、社会が存立するための人間の活動力のことである。社会・経済を構成する各種の組織が行うことのできる生産の能力のことである。

日本の社会科学では、次のような説明がみられる。

「使用価値の生産に役立つものとして一定の社会に属しているもろもろの力の総称」（河上肇 [1930]）。「人間の自然に対する制御能力」（置塩信雄 [1986]）、「生産するために人間が獲得している諸力」（『社会科学総合辞典』 [1992]）<sup>39)</sup> 等。

『資本論』においては、生産力は「労働の生産力」として捉えられ、技能、科学、技術、組織、生産手段、自然条件が主要な構成要素として取り上げられている<sup>40)</sup>。

生産力は労働力と生産手段から、生産手段は労働手段と労働対象から、構成される。労働手段は、生産技術の発達水準に規定され、「文明の測度器」と呼ばれる。労働対象は、資源から材料・部品に及び、資源の賦存状況や探査・採掘技術、材料・部品の生産技術などに規定され

39) 河上肇 [1930] 『第二貧乏物語』改造社（新日本出版社、2009年）。置塩信雄 [1986] 『現代資本主義と経済学』岩波書店。社会科学辞典編集委員会編 [1992] 『社会科学総合辞典』新日本出版社。

40) K・マルクス『資本論』第1巻、第1章。「とくに労働者の技能の平均度、科学とその技術的应用可能性の発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模および作用能力によって、さらにまた自然事情によって、規定されている」（大月書店、1968年、54ページ）。

る。

生産力は、労働力および生産手段の質と量によって、さらに各生産要素の社会的編成（組織と経営）によって規定され、社会的生産力となる。生産力の水準は、社会の発展の度合いを示し、労働力、労働手段、技術、組織、市場、知識などの質と量によって規定されるのである。

生産力は、技術によって大きな影響を受けるが、それを担う労働力、組織、経営によって規定されている。組織とは、共通の目標を有し、目標達成のために、人々の諸活動を調整し制御するシステムのことである。労働過程における労働力の編成が、労働組織である。経済学においては、土地、労働、資本が「生産の3要素」とされてきた。組織の重要性が高まるなか、組織も生産の基本要素とみなされるに至っている。

技術の中心は、労働手段としての機械にある。技術は、生産力の一構成要素である。生産力は、労働力、労働手段、組織、科学、技術、市場など多様な要素から成り立っている。それらを制御する人および組織によって、生産力は現実化し、社会的生産力となる。

生産力の中心は機械ではなく、それを担う人であり組織によって制御されているといえよう。その制御（全体労働）を巨大金融資本が独占し、生産力の「暴走」による地球環境の破壊や格差・貧困をもたらしているのが、現代社会の構図である。

#### 5.4 技術とは何か——地球性・社会性・階級性

さらに技術とは何かについても、問い直す必要があろう。技術とは何か、生産・労働・消費などといかに関係するか、技術はいかに発展するか、などをめぐって、戦前から近年まで多岐にわたる論争がなされてきた。技術論論争とも

呼ばれる。その中心に位置したのが、「技術とは何か」という技術の定義をめぐる論争である。「労働手段の体系」と捉える手段体型説と、「客観的法則の意識的適用」とみなす意識的適用説を軸にして行われた。

そうした論争をふまえ、資源浪費と技術跋行の視点からアプローチしたのが、十名[1981]<sup>41)</sup>である。しかし、技術の定義をさらに深く捉え直すまでには至らなかった。現代的な視点から技術を捉え直す契機となったのが、「型」論である。有形と無形の包括的視点から、「型」を社会科学的に定義し直した。それを通して、過程の中で、文化・倫理との関係、時間と空間、有形と無形の視点を織り込み、生産のみならず消費の視点まで含めて、技術を捉え直すに至る。

以上をふまえて、「技術」を次のように定義する。「技術とは、何かを作り出し享受する手段や方法あるいはその体系である」<sup>42)</sup>。「手段や方法あるいはその体系」の中心に位置するのは、労働手段であり、生産物ではない。ICT（情報通信技術）の中心をなすのは、労働手段としての機械である。

なお、「享受する」には、消費（および労働）の視点のみならず、評価と倫理すなわち社会・文化の視点も織り込まれている。技術は、人工的空間のなかだけに存在するものではない。その人工的空間および技術も、より広くは地球的自然の循環のなかに包摂される。いわば地球性を刻印されているといえよう。技術は、また社会の中で生成・発展し、社会的なニーズと深く関わるなど、社会性と階級性をも帯びているの

41) 十名直喜 [1981] 「技術論争—資源浪費と技術跋行をめぐる」『講座 現代経済学V』青木書店。北条豊のペンネームで発表。

42) 十名直喜 [2012], 前掲書, および十名直喜 [2017], 前掲書。

である。

## 6 生産力と生産性を捉え直す ——「生産力の発展」論への新たな視座

### 6.1 生産力の中心は何か——「過去の労働」と「生きた労働」の関係

筆者は、平松氏の「生産力の中心は技術、ICTが社会主義をつくる」論に疑問を投げかけ、「生産力の中心は人間、人がどのように発達するか」を織り込むべしとの見解を提示した。

資本主義が、一方で労働と環境を破壊しながら、他方でその制御に向けてどのような人間をつくりだすか、その可能性を探るべきである。それがないと、自動化論に聞こえるからである。

それに対して、平松氏は次のように応えられた。マニュファクチュアでは、「生きた労働」の結合…を新しい無償の社会的生産力として「生産力の創造」と捉えていた。そういう意味では、マニュファクチュアの時代そして現代の工芸品生産においては「生産力の中心は人そのもの」といえるだろう、と。

マニュファクチュア時代は、「生産力の中心は人そのもの」であったが、生産量が数千倍に高まった現代では、生産力の中心は「過去の労働の歴史的な産物」にシフトしたという。主役が、人という「生きた労働」から機械という「過去の労働」に代わったというのである。

その論理をもってすれば、「過去の労働」が圧倒的な力を持って君臨し、人間すなわち「生きた労働」を支配することになる。

### 6.2 現代資本主義にみる転倒した「生産力」像

確かに、現代資本主義社会においては、「過去の労働」としての技術や生産システム、金融システムなどが君臨し、「暴走」する様相を呈

している。巨大金融資本の自由自在な価値増殖の手段となり、地球規模の環境破壊や富の集中、貧困・格差の深刻化を招いている。

しかし、そこにおいて主役をなしているのは、「過去の労働」である機械ではない。生産システム、金融システムなどの組織であり、それらを駆使する金融資本であり官僚組織である。

聴濤弘 [2021] は、マルクスの「生産力」概念を「①人間それ自体、②協働労働、③私的所有のもとでの他者の物への転化（機械と同様）、④ある歴史的段階で我がものとして取り返すもの」の4点に整理している<sup>43)</sup>。

上記の①②③が、巨大金融資本によって価値増殖手段として自在に組織され利用される。その結果、資本本位の生産力は、単なる量的生産力として、GDP指向、際限ない経済成長として現れ、さらに深刻な環境破壊や格差・貧困をもたらす。

GDP、経済成長の数値には、負の側面もプラスとして加算される。巨大資本本位の大量生産、大量消費は、GDPや経済成長として表示される。それは、資源や労働力の浪費、生産物の大量廃棄につながり、環境破壊、人間の消耗をもたらす。環境や労働力の修復費用や各種活動もまた、GDPや経済成長に加算される。

### 6.3 あるべき「生産力」像と「生産性」概念の復権

「生産力」概念は今や、経済成長やGDPなどの量的生産力とみなされ負のイメージが強い。

43) 聴濤弘氏は、マルクス/エンゲルス [1845-46] 『ドイツ・イデオロギー』をふまえ、「生産力」を4点に整理している。聴濤弘 [2021] 『マルクスの「生産力」概念を捉え直す—社会変革の新しい道筋のために—』かもがわ出版、60-1ページ。



そこで聴濤弘 [2021] は、「生産力」概念を、マルクスの諸文献に立ち返って問い直す。「生産力」は、『資本論』において「生産諸力」（複数形）、「生産力」（単数形）、「生産性」などとして表示され、単数形の「生産力」と「生産性」は同じ意味で使われている場合も少なくない。その点に注目し、「生産性」概念を軸にして捉え直す。

「生産力」は、量的な概念とみなされるなど負のイメージが強い。そこで、「生産力」と「生産性」を区別し、人間本来の「生産性」して捉え直し、「生産性」概念の復権を提唱される。そのアプローチは、斬新で示唆に富む<sup>44)</sup>。

人間本来の、疎外から回復した人間の労働や生活の力量として、「生産性」概念を捉え直し、資本論に依拠しつつ、新たな展開を試みられたものである。

このような人間本来の生産性向上は、分権的・分散的で、自由・公正を相互に尊重し、個性の役割を認め合う職場や地域において可能になる。さらに、協働によって人間が学びあい、育ちあう中で、個性の共生やハーモニーを尊重しあうことを通じて実現される。

なお、上記の提案には検討すべき論点もみられる。

1つは、「生産性」概念それ自体にも、否定的イメージが歴史的に刻印されていることである。

「生産性」は、資本主義的合理化キーワードとして使われてきた。日本の大企業による生産性向上運動は、経営主導の労使関係の浸透のテコとなり、労働強化、搾取強化をもたらしてきた歴史的経緯もある。それゆえ、「生産性」概念は、「生産力」と同等あるいはそれ以上に手

垢にまみれ、否定的に捉える傾向も少なくない。

2つは、「生産性」概念は元来、量的概念であるという点である。「ある商品を生産するために社会的に必要な労働時間」であり、「より少ない分量の労働がより大きな分量の使用価値を生産する力」の指数である<sup>45)</sup>。量的概念に偏る傾向が強い中において、量的な指数概念をもって対置できるのか、が問われよう。

3つは、「生産性」概念の復権の論拠とされる『資本論』の記述は、むしろ本来の「生産力」概念とあるべき姿を提示したものではないか、という点である。

「最小の力の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行うこと」<sup>46)</sup>。それを、現代的にどう読むかが問われる。

「最小の力の消費」とは、「資源と労働の最小の消費」である。それを、「自らの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもと」で行う。

「すなわち最小のインプットで、人間的な生産環境のもと、適合的なアウトプットをするというバランスの取れた（人間と自然の）物質代謝像を提示したものである。

アウトプットをインプットで割ったものが、生産性指数である。生産性の向上は、(A)より少ないインプット（資源、労働）と (B)より多くのアウトプット（生産物、価値）という

45) K・マルクス [1867]『資本論』第1巻第10章。

46) K・マルクス [1894]『資本論』第3巻第48章。

44) 聴濤弘 [2021], 前掲書, 第5章。

2つの方法がある<sup>47)</sup>。

(A) = 節約志向に対し、(B) = 拡大志向といえる。『資本論』の上述は、(A) をベースにしたもので、(B) はみられない」

そこには、量的および質的な生産力の統合のあり方が示されている。それは、生産性にとどまらず、人間らしい労働、生産、消費などをも包括した物質代謝のあるべき姿、すなわち「生産力」の本来のあり方に他ならない。

なお前述の①②④には、本来のあるべき生産力概念も示唆されている。人間の尊厳と働く権利が確かな社会環境において、①②は本来のあるべき生産力として機能する。④が加わると、より人間らしい生産力になる。

「生産力」概念を、「生産」概念に立ち戻り、本来のあるべき姿として捉え直し提示すること、すなわち「生産力」概念の復権が求められているのである。

それは、人間らしい「生産性」概念の提唱とも共鳴するといえよう。共に手を取り合い、人間本来の「生産力」&「生産性」概念を取り戻していくことが大切である。

#### 6.4 「生産力の発展」論を問い直す——生産力の「劣化」と「発展」

聴濤弘 [2021] は、『経済学批判』の「序言」、すなわち「生産諸力の発展がより高次な社会をつくる」という唯物史観の定式を再考すべしと

47) かつて日本企業の生産性向上運動は、「(B) より多くのアウトプット」の追求には力を入れるも、「(A) より少ないインプット」の追求は相対的に軽視された。

労働強化やサービス残業によって (A) の見かけの増大を防ぐなど問題点も少なくなき、本来の生産性向上とは程遠いものであったとみられる。

いう<sup>48)</sup>。

まさに、「生産力の発展」とは何かがあらためて問われている。

そもそも「人間と自然との物質代謝の大規模な攪乱」という今日の事態は、果たして「生産力の発展」といえるのかどうか問われねばなるまい。40年前の小論<sup>49)</sup>で、生産力および物質循環の「巨大化」をめぐる、その内実は「資源浪費と技術跋行」にあると捉え、変革と制御に向けた研究のありかたについて、下記のように提起したことがある。

「こうした今日の事態は、公害・資源問題における生産力の問題をクローズ・アップさせ、生産力に対する生産関係の内容規定、生産力の量的側面と質的側面の区別等、従来の史的唯物論の理解の一層の深化を迫っている。」

「公害・資源問題」は今や、地球環境問題へと拡大し深刻化するに至っている。

「人間と自然との物質代謝」における「自然」とは、原初の自然ではない。「多くの世代をつうじて人間労働を介して継続された変化の産物」<sup>50)</sup>であり、人工的な変形を受けた自然（いわば「人工的」自然）に他ならない。

「人間と自然との物質代謝」は、地球的自然の物質循環の中であって、そこに変容を加える社会的な営みでもある。それは、「社会と自然との物質代謝」すなわち「社会的な物質代謝」に他ならない。

今や、巨大化した人間の物質代謝は、自然的な物質循環の範囲を量・質ともに超え、逸脱するに至っている。地下資源の大規模な乱用などによって、地球的自然の物質循環の規模を超え

48) 聴濤弘 [2021], 前掲書, 「まえがき」 & 序章。

49) 十名直喜 [1981] 「第5章 技術論論争—資源浪費と技術跋行をめぐる」、前掲書。

50) K・マルクス [1867] 『資本論』第1巻第5章。

る物質を排出するとともに、従来にない新しい物質（有害物質・重金属・合成物質など）を排出し、拡散・蓄積が進行している。その深刻な影響は、地球温暖化問題などに出てきている。

これらの多様な物質の循環を制御する力、社会的な物質代謝を持続可能なものにする力こそ、本来の生産力の核心をなすものである。

現代金融資本本位の生産力は、2歳前後の巨大児に例えることができよう。地球という小さな部屋で、分別のつかない巨大児が暴れまわり部屋を傷めつけている、という構図が浮かび上がる。それは、生産力の「発展」とはいえまい。生産力の「暴走」あるいは「歪み」に他ならず、生産力の「劣化」として捉え直さねばなるまい。巨大児を分別ある大人へと変えていく。すなわち、生産力の「暴走」にブレーキをかけ分別ある制御力を高めていくことこそ、今日求められていることであり、「生産力の発展」の道筋といえよう。

## 6.5 地球環境と人間に適合的な生産力への転換

「過去の労働」がどれほど巨大になり高度化しようとも、それを制御するのは生身の人間であり「生きた労働」である。社会や経営のシステム、技術は、過去の労働の産物であるが、搾取手段として利用され暴走することがないように、より人間らしく機能するように制御するのも、人間すなわち「生きた労働」である。

生産力の中心が「技術、ICT」（＝「過去の労働」）の如く金融資本本位に制御されているのは、現代資本主義の倒錯した姿でもある。金融資本本位の生産力の「発展」は、生産力の「暴走」と「歪み」をもたらすなど地球環境と人間・社会の深刻な破壊につながる。それを抑制しつつ、技術、ICTをより人間的なものに改良し、

人間らしい「生きた労働」が生産力の中心として躍動するシステムへ、どのように転換していくかが問われている。

現代のシステムや技術は、複雑化・巨大化・ブラックボックス化して、その全体像やプロセスが把握できなくなるなど、技能離れ、脱人間化も不断に進行しつつある。今や、「見える化」が多くの分野でキーワードになっている。それに対し、人間の五感と洞察力で捉えようとするのが、伝統的な「型」の理論である。「型」論を社会科学的に捉え直し、それをふまえて「等身大」のシステム・技術づくりを提示しているのが、十名 [2012] [2017] である<sup>51)</sup>。

量的な拡大志向ではなく、質的な生産力の発展、すなわち巨大化した社会的物質代謝を持続可能なものにする制御力の発展が求められているのである。それは、「力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとで、この物質代謝を行う」<sup>52)</sup> ことである。まさに、地球環境と人間に適合的な生産力への転換である。

それは、生産力の中心を人間に、人間らしい制御に取り戻していく道であるといえよう。

## 7 人間発達をめぐる『資本論』と21世紀の対話

### 7.1 工場と人間発達への視座——『国富論』と『資本論』にみる世紀的変容

経済学の名著は、その奥深い基礎に人間と労働の問題、働く人間の発達の問題をおいている。A・スミス [1776] 『国富論』、K・マルクス [1867]

51) 十名直喜 [2012], 前掲書。および、十名直喜 [2017], 前掲書。

52) K・マルクス『資本論』第3巻第7編第48章。

『資本論』（第1巻）は、その代表作といえる。

スミスの経済学は、社会内及び工場内における分業の考察から始まっている。分業は、一方で労働生産力と人間の熟練・技巧および判断力を高めるとともに、他方では人間が単純な作業に固定化されると、発明力、豊かな感性、判断力、勇気などが損なわれ、知的・社会的な特が犠牲にされるといった二面性を持つことを明らかにした。そして、人々の中に人間の性格のより高貴な側面をよみがえらせるには、公教育の制度を確立する必要があると主張した。

スミスは、資本主義時代における分業と交換の普遍的発展が、諸個人の欲求の多様化を促し、社会的接触の拡大を通じて全体的欲求に目覚めた社会的人間をうみだすことを明らかにした。

産業革命を経てスミスからほぼ1世紀後の機械制大工業の時代を生きたマルクスは、大工業に特有の労働と生活の急激な変貌を目のあたりにする。資本主義的生産が、さまざまな貧困・格差・人間疎外をもたらしつつも、人々の社会的欲求の体系を絶えず拡大し豊かにしていくことを通して新しい型の人間をうみだすことをより明確にした。

歴史的に刻々と変容する労働と技術、さまざまな人間像の舞台となった工場空間、それらを多面的・系統的に描き出したのが、『資本論』である。

十名直喜 [2008] は、「第9章 人間発達の経済学としての『資本論』」<sup>53)</sup>において、独自の視点から『資本論』を捉え直し、現代的に提示している。

それをふまえ、さらに発展させたのが、十名

[2012]『ひと・まち・ものづくりの経済学』の第9章である。

「第9章 工場と人間発達—『資本論』にみる労働と学びの原点」では、『資本論』の協業と分業から大工業に至る章に現代的な視点から光をあて、3つの俯瞰図として捉え直している。「図表9-1 工場（協業と分業）の経済学」、「図表9-2 工場法と人間発達」、「図表9-3 人間発達空間の創造」は、本邦初のオリジナルな図表とみられる。

図表9-1は、マニュファクチュアの協業、分業から大工業に至るプロセスで人間労働の新たな可能性が切り拓かれるとともに、細分化・階層化が強まり人間抑圧の手段に転化する構図を提示する。

図表9-2は、人間抑圧から人間発達へと転ずる、歴史的に出現した社会的な好循環の構図を提示したものである。大工業が出現し、工場労働の非人間的実態が顕在化する。それを規制すべく誕生した工場法（罰則付き）が、労働者の「自らの時間」「自由時間」を生み出し、多面的発達を促していく。

図表9-3は、工場法の教育条項と保健条項がもたらす労働児童の発達、工場環境の改善、その両者が促す人間発達の可能性と未来を、『資本論』と『経済批判要綱』をふまえて図式化して提示したものである。

『資本論』の人間発達論を読み解くには、上記のプロセスが必要とみられる。しかし、それだけでは、現代的な課題に答える人間発達論には至らないであろう。俯瞰的な歴史比較や産業論、価値論など多面的な視点から捉え直す必要がある。そこから、より豊かな像を汲み出すことができよう。

53) 基礎経済科学研究所編 [2008]『時代はまるで資本論』昭和堂の第9章（十名直喜「第9章 人間発達の経済学としての『資本論』」）参照。

## 7.2 ニュートン力学とアインシュタインの相対性理論にみる17世紀と20世紀の視座

A・ニュートンは、友人あての書簡で「私がかなたを見渡せたのだとしたら、それは巨人の肩の上に乗っていたからです」と述べている<sup>54)</sup>。

静止物体に働く力のバランスを扱う静力学は、ギリシア時代から長年月にわたり蓄積されてきた。ニュートンは、それらをふまえ、物体の運動についての動力学を構築した。17世紀のことである。地球上では、物体の早さが光速よりも十分に遅く、重力が十分に小さい、地球的自然においては、従来の宇宙観もニュートン力学で十分説明できる<sup>55)</sup>。

一方、A・アインシュタインの相対性理論では、動力は質量が時空間を歪ませることによって生じるとみる。アインシュタインは、時間と空間を結びつけることにより、万有引力などの諸現象を、「時空連続体の歪み」として捉え直した<sup>56)</sup>。アインシュタインは、ニュートン力学の宇宙観（静止体の光速≠動体、物質≠エネルギー、時間はどこも同じ）に対して、新たな宇宙観（光速不変、物質=エネルギー、時間の流れは異なる）でもって捉え直したのである。

しかし、アインシュタインの相対性理論は、ニュートン力学の否定ではない。地球的自然をふまえたニュートン力学の法則を超えて、より広い宇宙の世界を俯瞰する理論であり、ニュートン力学の法則をも包含しているのである。

54) フリー百科事典『Wikipedia』「巨人の肩の上」参照（2021年4月1日アクセス）。

55) フリー百科事典『Wikipedia』「ニュートン力学」など参照（2021年4月1日アクセス）。

56) フリー百科事典『Wikipedia』「一般相対性理論」「アインシュタイン」など参照（2021年4月1日アクセス）。

## 7.3 『資本論』にみる19世紀資本主義の解明と21世紀への示唆

ニュートンとアインシュタインの関係は、『資本論』と現代人の関係になぞらえることができるのではなからうか。

平松民平 [2021.2.23] は、『資本論』の意義と限界について、次のように指摘する。

『『資本論』でもマルクスが言わなかったことの中に、現代資本主義理解に必要な重要な事柄が存在していると思う。マルクスの50%の敬意尊重と50%の否定がマルクスの正しい歴史的形象だと思う。』

確かに、『資本論』は19世紀の産物であり、歴史的制約を免れないことはいうまでもなからう。しかし『資本論』ほど、資本の運動法則、資本主義の本質を体系的に深く分析した書は、その後も見当たらない。現代もなお、『資本論』を超える資本論、資本主義論は出ていないとみられる。

情報通信技術や遺伝子技術などの発展、金融資本の巨大化、社会、産業、工場、労働などの変貌、環境問題や貧困・格差問題の地球的深刻化などは、19世紀とは異なる様相を呈している。しかし、『資本論』で解明された資本の運動法則が全面展開する世界でもある。それゆえ、『資本論』の「50%の否定」ではなく、その肩に乗って、より広い視点から深め捉え直す、すなわち19世紀と21世紀の対話が求められているといえよう。

## 7.4 人間発達論への現代的な視座——『資本論』の世界を超えて

### 『資本論』の世界への現代的眼差し——専門化と全面発達、熟練

十名直喜 [2012] 『ひと・まち・ものづくりの経済学』の「終章 環境文化革命と人間発達」

では、分離・文化から人間主体の再結合・融合化へという視点から、捉え直している。さらに、現代産業論として体系的に捉え直したのが、十名直喜 [2017]『現代産業論』である。

『資本論』の機械制大工業論、人間発達論に対し、一面的発達・専門化と全面発達、職人的労働と熟練論、環境文化革命と知的職人、労働価値論と固有価値論の視点から現代的に掘り下げたものである。

一面的発達（専門化）と全面発達の関係について、『資本論』では、大工業が促す労働転換、工場法が促す教育と自由時間の視点から捉えている。一面的発達と専門化は、ほぼ同義とみなされている。

しかし、「専門化」と部分労働への「特化」、「固定化」は、重なり合う部分も少なくないが、同義ではない。技を覚え身につけていくには、人は限られた専門（いわば「部分労働」）から入らざるを得ない。「一芸に秀でる」という言葉があるが、「1つの専門を究める」こととほぼ同義とみられる。さらに、「一芸は、万芸に通ず」という格言もある。一芸を磨き究めるなかで、学びと創造のコツを見出し体得するからであろう。体得の意味を考え明示化するには、一般的な教養が必要で、教育の意義もここにある。

『資本論』には、「一芸は万芸に通ず」、学びと創造のノウハウや手法などの視点はないとみられる。職人的熟練は、機械制大工業の下で破壊されたはずであるが、無限の可能性を秘めている。現代の熟練とは何かが問われている。筆者は、「システムの熟練」として提示している。

### 労働価値論と固有価値論

ものづくりは農業と工業にまたがっているが、工業に限定し、人工的な人間の営みとして

捉える見方も少なくない。

労働価値論は、無限の自然を前提に工業的産業における人間労働を対象にして、（リカードにより）一般化されたものである。18世紀後半から19世紀にかけて広がる作業労働（肉体労働）の同質性に着目した理論であり、当時の歴史的産物といえる。労働価値論における労働は、複雑労働と単純労働などに区分されるにとどまり、労働が生みだした財は「過去の労働」の塊とみなされる。

今や有限な地球という視点から、自然と人間の協働の営みとして、産業を捉え直すことが求められている。人間と自然の固有性に着目するラスキンの固有価値論は、示唆に富む<sup>57)</sup>。

財を、「過去の労働」の塊としてみるだけでなく、働き様・生き様の凝縮したものとして、すなわち「型」として凝縮される習慣・伝統とそれを継承しつつ乗り越えようとする創造的な営みとして、文化的に捉え直すのが、固有価値論といえる。

### 環境文化革命と知的職人

十名 [2012] の「図表終-1 産業・工場・主役の発展と環境文化革命」は、数百年にわたる社会、産業、工場、主役の変遷を俯瞰したものである。情報通信革命さらには環境文化革命への移行について、現代をその過渡期として位置づけている。

地球的自然と社会を保全し生かす方向で、農業と工業、サービス業の「高次な総合」、システム化を進めていく。とくに、川を媒介に山・平野（里）・海の有機的なつながりと発展、人間との自然の豊かな関わり、人間らしい文化的

57) 池上惇 [2003]『文化と固有価値の経済学』岩波書店、第1章。

な生活を再構築する。それを、環境文化革命として提示している。

資本主義的に疎外され分離・分化された状態から、人間的な再結合・融合化を図っていく。それを担う職人労働の現代的再生が欠かせない。それを担うのが、知的職人であり、社会人研究者である。

## 8 大工業論をめぐる 20 世紀と現代の視座 ——半世紀の時空間を越えて

### 8.1 半世紀前の大工業論文との再会——「25 歳の自分」と向き合う

半世紀近く前に（ペンネームで）発表した拙稿を発掘されたのは、平松氏である。ICT 論をめぐって対話している最中、「戸名直樹論文を発見」のメール（2021.2.13）をいただいた。戸名直樹（ペンネーム）[1973]「大工業理論への一考察（上）」『経済科学通信』第7号および、同 [1974]（下）『経済科学通信』第8号である。

その日のうちに平松氏へお送りしたお礼メールには、下記の文面をしたためている。その論文がもたらした、わが研究人生におけるインパクトの大きさを語ったものである。

「25歳、鉄鋼メーカーに勤めて2年半の頃に、掲載されたものです。製鉄所での半年間の実習で体験した生産現場の迫力は、資本論の世界そのものでした。その衝撃を、資本論などに立ち返りつつ、芝田進午氏の理論と格闘したものです。

その後、本・論文・書評など200本・冊近く公刊してきましたが、最初の1本となったのが小論です。そこでの手応え、多くの反響が、その後の仕事・研究人生を方向づけたと言えますでしょう。」

1971年に鉄鋼メーカーに入社し製鉄所に配属されて、2年が過ぎた頃、大阪2部基礎研（森岡孝二氏主宰）に参加する。闊達な議論に刺激され、2～3カ月で一気に書き上げた作品（上）である。公刊された初めての論文となる。

### 8.2 芝田進午氏の労働過程論 & 科学・技術労働論

革新の息吹に満ちた1970年代初め頃、注目を集めたのが芝田進午氏の理論である。『資本論』をふまえて独自の労働過程論を提示し、切れ味鋭い科学・技術論や精神労働論を展開していた<sup>58)</sup>。

芝田氏は、「研究の導きの糸となったのは、とくにマルクス主義の大工業理論（その一環としての科学・技術革命の理論をふくむ）ならびに大工業と資本主義の矛盾についての理論にほかならなかった<sup>59)</sup>」という。

『資本論』では、資本主義的生産過程を「労働過程」と「価値増殖過程」の両側面から捉え、「労働過程」を自然と人間の物質代謝過程として位置づけている。一方、芝田氏は、労働過程を「労働の技術的過程と組織的過程の統一」として「労働過程の二重性」として把握する。

芝田氏のアプローチに対して当時、組織的過程を入れるということは、価値増殖過程を入れることになり、本来の「労働過程」論と異なり問題があるとの指摘もあったが、全体像に迫る批判はなかった。芝田氏の大工業論、科学・技術革命論に対して、異を唱えるのが難しい状況にあったとみられる。

しかし、製鉄所の生産現場からみると、「違

58) 芝田進午 [1971]『科学=技術革命の理論』青木書店、芝田進午 [1966]『現代の精神的労働（増補版）』三一書房他。

59) 芝田進午 [1971]、299ページ。

和感」もすくなくない。「芝田氏が提示されるバラ色の力強い展望と現実の資本主義的矛盾の捉え方に対して、「ほんとうだろうか?」という疑問やひっかかり、あるいは一種の違和感」を懐く。その問題意識をもとに、正面から切り込んだのが、拙稿である。平松氏のメールで、半世紀近く前にタイムスリップし、当時の感触が脳裏をよぎる。

### 8.3 物質的富の生産と科学・技術の生産との関係——ICT論への視座

十名〔1973〕は、『資本論』第5章の「労働過程」について、次のように捉え直す。「物質的富の生産の「単純にして抽象的な諸要素」に関わる問題であり、社会的生産の特定の歴史的発展段階を前提とする機械制大工業あるいは科学・技術そのものの生産過程は直接の考察対象とはなっていない」。

一方には本源的（「人間の一切の社会形態に等しく共通」）な労働があり、他方には資本主義社会において発展した（「特定の社会的形態」の）科学・技術労働がある。芝田氏の理論には、両者の混同がみられる。

そのように批判した上で、芝田理論を超える新たな視点を提示する。

まず、「物質的富の生産と人間そのものの生産という史的唯物論の基本」視点から捉え直すことである。それをふまえ、「物質的富の生産と科学・技術の生産との間の分業という新しい観点」を提示する。

さらに、それをふまえ、独自の「科学・技術労働」論を提示する。「科学・技術労働は、科学・文化・技術の生産として、人間そのものの生産にかかわる問題」である。「科学・技術労働は元来、人間の生産力＝生命活動の普遍性に由来するものであり、全体労働者としての人間の機

能に属する」。

「物質的富の生産…にあたって持ち込む分業は、労働の分割であり、細分化であり、部分労働の極限までの発展」である。「分業が、資本主義的価値増殖の担い手になった場合に、全体労働の役割はいかなるものか」と問いかけ、「ここにこそ、実は問題の核心がある」としている。

全体労働の一翼を担う科学・技術労働も、資本主義的価値増殖の担い手として組織される。その結果、剰余価値生産の持つ官僚的・支配秩序が、科学・技術・芸術など創造活動の領域まで浸透する。人間の自由な創造的領域、内面の自由な世界にまで、剰余価値秩序が浸透し、深刻な疎外状況を生み出すに至っている。

今や市民生活にまで深く浸透し、大人から子供に至るまで、数時間から十数時間にわたって、スマホなどに縛られている。巨大ITのシステムが、公的な情報交流のプラットフォームを占有し、人間の自由時間、思索、内省の領域にまで浸透・管理するに至っている。それがもたらす疎外の深刻さ、闇の深さは、想像を絶するものがあると推察される。

芝田氏との論争で扱ったテーマは、より現代性を帯びているといえよう。

### 8.4 科学の普遍性、大工業&情報財の革命性と人間発達

芝田氏は、「科学・技術労働＝全体労働を、物質的富を生産する部分労働から捨象してきて、一般的に労働過程として取り扱い、本来、この労働は価値増殖の担い手たりえない」という。芝田氏の科学・技術革命論は、「価値増殖の担い手たりえない」とみなす科学・技術労働の「革命性」に依拠したものである。

芝田氏は、「科学の普遍性」に注目する。科学の普遍性は、階級社会における不均等発展の



法則を止揚する、共同体的ならびに私有財産的制限を超越する本質をもつ、共産主義を志向している、というのである。

上記にみる芝田氏の見解は、情報財をめぐる平松氏の見解と共鳴し合うように感じられる。平松氏は、情報財のもつ革命性を次のように捉えている。

物質財から情報財へのシフトに伴い、所有も変容する。物質財は所有（私的、社会的所有）を伴うが、情報財は共有でき私的所有なしに自由に利用できる性質をも持つ。情報財は、「所有なき財」である。それゆえ、「資本主義に不適合な財」であり、「超共有」の共産主義に適合する財である。

平松氏は「情報財の共有性」が共産主義に適合するとし、芝田氏は「科学の普遍性」が共産主義を志向するという。両者は、いずれも共産主義と未来社会を見据えて論じられているといえよう。

芝田氏は、科学の普遍性、大工業および科学・技術労働の革命性など、それぞれに内在する本来性が資本主義の終焉をもたらすという。

芝田理論に対して、十名 [1973] は、部分労働と全体労働の視点、およびそれをふまえての人間発達の視点から批判する。

『資本論』における大工業の革命性は、その技術的革命性だけにあるのではない。労働者階級に全体性回復への手かかりと物質的基礎をあたえる点を重視し、そのような人間発達が資本主義社会の止揚を迫る。

部分労働と全体労働の概念は、資本主義的な協業を媒介にして出てきたものである。分業によって、両者は対立的に発展する。さらに、大工業のもとでのその極限までの発展は、全体労働の発展にも障害となる。「その矛盾は、部分労働（個別の人間労働）における全体性の復活

=全体労働への止揚=人間本来の諸機能のより高次の段階での回復, によって真の解決を見る」(十名 [1973]) ののである。

十名 [1973] は、部分労働の全体性回復、人間発達が資本主義社会の変革のカギを握るとみたのである。

半世紀近く前の芝田・十名論争は、種々の限界をはらみつつも、現代的な課題とも切り結ぶ側面を有しているとみられる。

それは、ICTと資本主義との関係を問い直し、ICTの技術とその発展・利用のあり方をどう評価するのかを考える上でも、示唆を与えている。

## 9 おわりに

### 9.1 平松氏&芝田氏との対話が切り拓く ICT 論

平松氏の「資本主義とICT」論は、生産力と生産様式、技術と組織・経営、労働、大工業とICTなど論点は限りなく広く深い。さらに、半世紀近い前にペンネーム（戸名直樹）で発表した小論（十名 [1973]「大工業理論への一考察」）を発掘されて、それへのコメントもいただく。小論は、期せずして、それらを俎上に載せての考察となった。

十名直喜 [1973] は、芝田進午氏の科学・技術革命論、精神労働論と対峙するなかで、生産力と生産様式、大工業、技術と組織、科学・技術と労働、全体労働と部分労働、人間発達などについて論じている。今日、小論での考察のほとんどが、そこで論じられているのである。半世紀前の自分と対話し、驚きつつ学び直す今の自分がある。

芝田氏と平松氏が取り上げる論点も、半世紀の隔たりはあるが、重なり合う部分が少なくない。『資本論』を軸にして「現代」と「未来」を論じている部分も共通する。

半世紀前には、芝田理論への違和感（製鉄所現場とのずれ）が、十名 [1973] の起点となりバネとなった。21世紀の今、それによく似た感覚を、平松氏のICT論に懐いたのである。その違和感を起点にまとめたのが、小論である。それゆえ、平松氏が十名直喜 [1973] に注目されたことに、半世紀にまたがる絆を感じざるを得ない。芝田理論と平松理論に共鳴し合う側面も感じた次第である。

芝田氏は、科学・技術労働の本来的性格は資本主義と矛盾すると捉え、科学・技術革命の推進力になるとみた。平松氏は、ICTの技術が資本主義を終焉に導くという。両者の類似性に思いが及んだのも、平松氏の小論発見のおかげといえよう。

芝田氏は、哲学・経済学・社会学、そして科学・技術・労働などにまたがる屈指の理論家であり、知の巨人である。平松氏は、ソニーで40年近く働きつつ（『資本論』などを）学び研究してきた技術者&社会人研究者である。ICT現場での知見をふまえた考察には、独自の深みと迫力がある。芝田理論と出会った半世紀前の興奮を想起させる。

半世紀ぶりの（25歳の自分との）対話、さらに現代的視点からの議論、それに基づく考察は、スリルに富む。それを促す場となったのが、働学研（博論・本づくり）研究会である。第17回働学研（2021.1.23）に平松氏が参加されたのが、起点となった。

## 9.2 聴濤氏との対話が誘う生産力論の新地平

第19回働学研（2021.3.20）には、聴濤弘氏が新たに参加された。「第2分科会 資本主義と人間発達—生産力&物質代謝論の新地平」に興味を持たれてのことである。

その夕方、聴濤氏から電子メールをいただき、

そこから新たな研究交流が始まる。

「まさにいま私が中心的に考えている問題でした。私はマルクスのいう「生産力」とはそもそも何かを捉え直し、今日出た諸問題を論じた本を、つい先日、「かもがわ出版」から上梓しました。」

そこで、お互いの近刊本の交換を願っていると、新刊本（聴濤弘 [2021.3] 『マルクスの「生産力」概念を捉え直す』かもがわ出版）を送っていただいた。それに対するコメントを早速お送りする。

「生産力、情報、技術、労働、物質代謝などについて、マルクスの膨大な著作をふまえて、実に深く創造的に考察されています。…

最新の議論や研究も織り込まれ、実に鮮やかな切り口と拝察します。みずみずしい感性と視点は、85歳を感じさせない迫力があります。」

一方、十名 [2020.2] 『人生のロマンと挑戦』社会評論社および十名 [2021.1] 「産業イノベーションと環境文化革命」『SBI大学院大学紀要』に対して、聴濤氏からコメントをいただいた。

「ご論稿、拝読しました。大いに共鳴します。基本的論点である、技術革命と社会革命の両立と新たな結合、産業イノベーションと環境文化革命というご主張に全く賛成です。ということは基本点で共鳴するということです。

各論に入ったところで「型」「有形」「無形」問題について「無形」の価値がますます増大していることについても大いに賛成です。私は「生産性」を強調しましたが（拙著では労働者の問題と環境問題に限って論じていますが）、文化・産業のあり方も視野に入れなければならいと教えられました。「生産性」の内容を現代にそって豊かにするということです。

とても重要と思ったのは、私は「生産性」を我がものにとりかえすことを強調しましたが、

それはまさに社会人が「働き・学び・研究する」ことであると思いました。企業の経営を学びとることをしなければ、我がものにするにはできません。個人の人生ということにとどまらない問題だと感じました。また社会の転換期には哲学が必要というのも卓見と思いました。」

聴濤氏との本・論文の交換、そして読後感の交流は、さらに聴濤弘 [2021.3] 書評会の提案・実施へと展開する。

聴濤弘 [2021.3] には、平松氏の作品も取り上げられている。そこで、平松氏にはそれへのリプライも含めて書評をお願いするとともに、聴濤氏には書評へのリプライをお願いする。そして、両者へのコメントを小生が担当する。

### 9.3 働学研での対話の魅力とダイナミズム

そのような形での書評会を、第20回働学研(2024.4.17オンライン)の第3分科会で行い、刺激的で示唆に富む議論がなされた。

書評(平松)、リプライ(聴濤)、総括コメント(十名)をふまえての全体討論(20数分)では、多くの方から貴重なご指摘をいただいた。

「生産力については、消費者の欲求に適合したあり方を考えるべし」(小野)。

「地球環境破壊や人間の生存の危機を招いている今日の生産力は、生産力の発展といえるのか」(野口)。

「環境容量の枠内での技術、システムのあり方を考えるべし」(樋田)。

「史的唯物論ということで唯物論を前提に議論されているが、年齢を重ねるほど心の重要性を感じている。これをどう解くのか」(岩田)

「物質的労働が基本をなす一方で、非物質的な生産や労働の比重が高まり、人間発達や幸せのあり方への欲求の強まりがみられる。両者を統合的にどう捉えていくか。」(中谷)など。

第3分科会の熱気と手応えは、終了後も続く。9本(報告者相互4本、参加者5本)のメールが、研究会終了後の1日以内に届いた。参加者の感想・コメント5本(濱、藤井、中野、小野)は、質・量ともかなり高く重いものがある。

これらの論点や課題については、小論でも取り上げているが、すべてに答える時間&能力もない。働学研で共有し、これからも発表や議論を通して多面的な角度から取り上げていきたい。

小論はまさに、そうした多様な出会い、学びあい、磨き合いの知的空間、交流の広場から誕生したものである。